

令和 5 年 6 月 13 日現在

機関番号：32304

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K02417

研究課題名（和文）中国西南における少数民族の文化伝承の実践に伴う教育のシステム変容に関する研究

研究課題名（英文）A study on the systematic transformation of education along with the practice of cultural transmission of ethnic minorities in Southwest China

研究代表者

金 龍哲（JIN, LONGZHE）

東京福祉大学・教育学部・教授

研究者番号：20274029

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：今世紀に入って中国西南の少数民族の文化伝承の実践に幾つかの注目すべき動向がみられた。それは従来の民族固有の文化伝承の仕組みと大きく異なるだけでなく、国民育成を目指して展開してきた近代学校教育にもシステム変容を促しつつある。本研究は、少数民族の文化伝承の実践がもたらす教育のシステム変容に焦点を当て、少数民族の文化伝承モデルの可能性を検証することを目的とし、具体的にはフィールドワークを通して、少数民族が真に求める文化伝承とは何か、如何なる伝承装置の構築が模索されているか、それらは現有の教育システムに如何なる変容をもたらしているか、新しい文化伝承装置は他の民族にも適用可能か、を中心に検証を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

中国における少数民族の文化伝承の中心的な役割を担ってきた「二言語教育」は、文字を持たない小規模の少数民族が対象外とされてきたこと、事実上、「二言語教育」が少数民族が「真に求める文化の伝承」を担うことが出来なかったことが指摘されている。

現地では、文字を持たない少数民族の言語消失の危機を如何に回避するか、そして民族的アイデンティティの根拠でもある民族固有の信仰体系を如何に存続させるかが少数民族が「真に求める文化伝承」の課題として浮上り、注目すべき実践が展開されている。従来の枠組みに囚われず、言語や信仰の存続を目指して独自の伝承装置の構築を目指す実践に視点を合わせた所に本研究の学術的意義がある。

研究成果の概要（英文）：There have been several remarkable trends in the practice of cultural transmission of ethnic minorities in southwest China since the beginning of this century. It is not only greatly different from the traditional mechanism of cultural transmission unique to ethnic groups, but also promoting systematic transformation in modern school education that has been developed with the aim of citizen preparation.

The purpose of this study is to examine the possibility of a model of ethnic minority cultural transmission by focusing on the changes in the education system brought about by the practice of ethnic minority cultural transmission. Specifically, it mainly investigated through fieldwork, the core content of cultural transmission that ethnic minorities truly seek, whether the approaches of transmission that are being explored, what kind of changes are being made to the current education system, and whether the new transmission approaches can be applied to other ethnic groups.

研究分野：教育人類学、比較教育学

キーワード：文化の伝承 伝承装置 文化多様性 中国西南 少数民族

## 1. 研究開始当初の背景

中国西南をフィールドとした調査で明らかになった事実の一つは、建国以降の少数民族教育において中心的な役割を担ってきた「二言語教育」が露呈したシステムとしての限界である。具体的には、文字を持たない小規模の民族が対象外とされてきたこと、豊富で多様な民族文化に対して言語中心の教育には限界があったこと、信仰体系など各民族の独特の文化は近代学校教育とは本質的に相容れない性格を有していたことなどを指摘することが出来る。現地のエリートたちは、民族言語消失の危機、民族独自の祭りや行事の衰退、土着の信仰体系の崩壊、とりわけ宗教的職能者(以下「聖職者」)の後継者不足を「真の文化伝承」の最も深刻な課題として位置づけ、現行のシステムが「本腰」を入れていないと訴える。

今世紀に入って、民族の文化の保護と伝承を巡って様々な実践が展開されるようになるが、最も注目すべきことは、それらの実践が「二言語教育」の制度的枠組みを遥かに越えて展開されてきたことである。母系社会を営むモソ人自らによって編集された学校開発教材「神秘的永寧 モソ人の故郷」、永寧郷浪放小学校でのモソ人の伝統舞踊(ジャツォ舞)のラジオ体操化への試み、麗江市方国瑜小学校や五郷一鎮小学校の「ナシ族文化読本」等の教材開発と実践、貴州省小黃村小学校におけるトン族の伝統的な歌垣(侗族大歌)の教育、雲南省麗江市の白沙小学校におけるナシ族伝統文化の教材『白沙 私の故郷』の開発と伝統文化教育の実践、寧浪プミ族の小学校におけるプミ族学級の附設、イ族の宗教的職能者養成校の設置、プミ族のハングイ養成を巡る実践...などがそれである。

これらの実践は、従来の教育の在り方に対して制度的変容を促し、少数民族が自らの文化伝承に適した新たな伝承モデルの構築を目指した動向として注目される。

## 2. 研究の目的

教育のシステム変容を誘発する要因は様々であるが、少数民族の文化伝承の実践がその要因の一つとして浮上したのは注目に値する。少数民族の文化は、かつては村社会や氏族共同体において歴史的に形成された装置を通して次世代へと伝わったが、建国以降は「二言語教育」の形で学校教育に組み込まれ、1980年代以降は前述の通り、より多様な民族文化が教育課程として学校教育に定着されるようになった。いずれの事例も従来の「二言語教育」の制度的枠組みを超えて展開した点で共通している。

文字を持たない小規模民族が言語を含めた多様な民族文化の伝承、特に聖職者の養成という「真の文化伝承」を求め始めた時、既存の仕組みは種々の不適合を露わにした。つまり、国民国家の枠組みにおける「国民教育」と民族文化の伝承を目指す「民族教育」が学校という空間において両立することを前提に設計された制度は、その実施過程において55の民族の言語や信仰の伝承を受け持つことの非現実性を露呈したのである。

そこで、本研究は、21世紀に入って活発化した少数民族の文化伝承の実践が教育にもたらしつつあるシステム変容とその意義を明らかにし、伝承装置の構築に向けた制度モデル創出の可能性を検証することを目的とした。具体的には、フィールドワークを通して少数民族文化伝承の実践と教育のシステム変容の事例を分析・分類し、文化伝承の実践が教育にシステム変容をもたらす新しい要因となった背景、民族言語の保護と聖職者の養成が文化伝承における位置づけ、少数民族の文化伝承の実践によって生じた教育のシステム変容とその意義、少数民族自らの文化伝承装置の構築を目指した制度的モデルの可能性等についての検証を試みた。

### 3. 研究の方法

本研究は、研究対象が山地の文字を持たない小規模民族であったこと、調査内容が民族言語を含めた多様な文化伝承の実践や聖職者養成など今まで注目されなかった文化伝承の仕組みであったこと、そして今まで築いた現地における協力体制などの諸条件を踏まえて、フィールドワークの研究手法を用いることとした。文化伝承を巡る社会歴史的背景と現状、実践に関するデータと情報は、現地での必要滞在期間を出来る限り確保し、現地の集会、行事、祭や生産労働への参加、学校や行政主催の研究会や会議への列席、授業参観、家庭訪問など、現地に身を置き、インフォーマントと現地の人々との具体的な状況と関わりながら、参与観察とインタビューなどを通して第一次資料の収集に努めた。

まず、課題を明確化するため、2回の予備調査(第1回:2016年8月26日 9月1日、第2回:2017年8月24日 - 9月7日、予備調査値:貴州省威寧県と雲南省寧浪県)を実施し、課題を「真の文化伝承」対「既存のシステム」という構図に単純化して、仮説設定を行った。

言語と信仰など少数民族文化の核心をなす要素は学校教育制度には馴染まない。

「国民教育」と「民族教育」の両立を前提とした建国当初のシステムは、その制度設計自体が本質的不親和性を孕んでいた。

文化が民族的であればあるほど、既存の学校教育制度とのミスマッチは大きくなるので、そうした文化の伝承はそれに適した独自のシステムの創出を必要とする。

中国西南での調査は、こうした仮説を踏まえて、文化の伝承を巡る対象民族の意識と文化選択行動の全体像を把握し、サンプリングを行い、学校における民族文化伝承と伝統的な文化伝承の在り方に配慮しつつ、少数民族自らの文化伝承装置の構築を目指したモデル提供の可能性を検証した。民族文化に対する少数民族の意識と要請は、民族によって一様でない。制度的モデルの提示は、この点を踏まえてあらゆる状況に適用可能な包括的で普遍的なモデルの構築を目指すのではなく、実際のニーズと実行可能性に配慮した課題別の制度モデルの提示が有効と考える。

計3回の現地調査(第1回:2018年3月26日 30日、第2回:2018年9月1日 6日、第3回2019年8月19日 9月14日、調査地:雲南省寧浪県、麗江市、貴州省威寧県)は、主としてインタビュー形式の半構造的面接法を用い、一部の宗教的儀式や行事については参与観察を行った。インフォーマントには、「プミ族学級」附設の小学校(雲南省寧浪県落水村)、イ語双語職業学校(貴州省威寧市)、プミ文化学校(雲南省寧浪市)、トン族の車民小学校(貴州省栄江県)、ナシ族の白砂小学校(雲南省麗江市)の関係者(教師、生徒、校長、教育行政担当者)、村民、民族文化伝承担当者、宗教的職能者、卒業生が含まれる。なお、日本においては、比較方法論の視点に立脚して危機言語の調査(2018年8月21 25日、東京都八丈島)、「神殿入」の参与観察(2018年11月3-4日、広島県大和町)、チャッキラコ保存現状調査(2018年12月-2019年8月まで計4回、神奈川県三浦市)を実施した。

### 4. 研究成果

#### (1) 学校教育のシステム変容を迫る諸実践

学校教育における少数民族の文化伝承の実践は、今世紀に入ってその多くが内容的にも方法論的にも建国以来の「二言語教育」の制度的枠組みを越えて展開しているが、その典型例として雲南省プミ族の「普米双語班」(プミ族二言語クラス)附設を巡る一連の実践を挙げることが出来る。

プミ族のエリートたちは、プミ語消失危機の回避策を学校教育に求めた。公立小学校にプミ族の生徒で構成されるクラスを特設して民族の言語を守ろうとしたのである。2010年に県政府の認可を得て、プミ族生徒のみで編成されたクラスが附設された。生徒は第4学年から募集し、

定員 50 名でスタートを切った。全員寄宿制で、生徒の住食にかかる費用と学費は寧浪県プミ族伝統文化保護協会が負担した。プミ族の宗教的職能者を教師として採用し、独自で編纂した教材で授業を行った。順調に滑り出したかに見えたが、三年で財政難を理由に中止に追い込まれ、2014 年に永寧郷落水小学校に移転、2 年後には入学希望者皆無で廃止となった。関係者は挫折の理由を立地条件の悪さ、奨学措置の欠如、寄宿制の不人気を挙げ、環境を整えて再開する計画だが、見通しが立っていない。このプミ族の「普米双語班」の附設の実験は、その動向が注目されるが、少数民族が自らのニーズに基づいて制度設計を行い、独自の教材を開発し、前例のない教員採用人事を行った点において今後の動向が注目される。

## (2) 宗教的職能者の育成システムを模索した実践

中国西南にはイ族のピモ、ナシ族のトンパ、モソ人のダバ、チャン族のスビ、ハニ族のモピ、プミ族のハングイなど、現在、269 種類の名称を持つ宗教的職能者が存在している。土着信仰の絶対多数は、寺院や教会のような宗教活動を行なう独自の場所を持たないし、組織も存在しない。また、日常の生活から乖離した宗教独自の行事や祭日も無に等しい。特に、独自の制度化された聖職者養成システムを持つキリスト教、仏教やイスラム教のような巨大宗教とは異なり、聖職者の継承は自然発生的に師弟関係を通して伝わったり、父から息子へ、祖父から孫へ、おじから甥へというふうに、家系の男性から男性に（伝内不伝外）伝わったりするケースが多い。こうした家系や個人的要因に大きく左右される伝承システムの限界に、建国初期から始まった度重なる政治的キャンペーン、80 年代以降の急激な社会変動が相まって、聖職者の後継者の不足の問題が急浮上した。少数民族のエリートたちは、聖職者後継者不足の問題を民族の信仰体系の存続、民族的アイデンティティの確立と維持、そして民族文化の整理、選択、伝承と直結する課題として重要視し、問題の解決に乗り出しつつある。先ず、注目されるのは学校教育を通して宗教的職能者の育成を目指した貴州省のイ族の取り組みである。

イ族の宗教的職能者のことを「ピモ」と呼ぶが、他の民族と同様、後継者不足は深刻である。自らの力で学校を設置し、宗教的職能者を育成しようとして設置されたのが「畢節イ文双語職業学校」である。学校関係者は、その特徴を「政府の許可を受けて設立した正規の学校」で、政府から土地の提供、教師の配置等の援助を受けていることを挙げた。ピモ伝承の仕組みと経典が地域によって異なるので、六つのイ族方言に配慮して教育課程を組む。全員寄宿制、完全無償制を導入し、制服も無償で提供される。週休一日という過密な学校カレンダーと時間割が設定され、ピモの資格を持つ教師と一般の教師によって授業が行われる。「畢節イ文双語職業学校」は観光、美容、家政など幾つかの学科を有しているが、学校関係者は「ピモ学校」と略称し、「正規のピモ養成校」としてピモ養成が特別な位置づけをされていた。しかし、ピモ養成は他の学科より必ずしも順調とはいえない。ドロップアウト率が高く、卒業までたどり着く者は極わずかである。ピモ資格の取得率と年度別卒業者数も不明である。近年の学生募集要項にもピモ養成に関する情報が掲載されていない。教育の重点が明らかにピモ養成から通常の職業教育にシフトしたのである。「正規の学校教育」で民族の宗教的職能者を育成する試みは、イ族のピモ伝承の歴史においても、また建国以降の学校教育においても例を見ない試みだが、いわゆる学校の正規性の追求と民族の「真の文化伝承」とは相容れない側面があり、結果的には公教育制度との不親和性が改めて証明された事例といえる。

次に、注目したのは宗教的職能者育成の第三の道の可能性である。

前述のイ族と同様、プミ族のエリートたちも宗教的職能者の後継者不足問題の解決策を学校教育に求め、自前でハングイ養成校の設置に乗り出した。プミ族は、雲南省と四川省の境に広がる山岳地帯に居住する人口 4 万人未満の少数民族であるが、雲南省の寧浪県には 10,930 人が居

住しているとされる。文字を持たないが、言語を持ち、独自の信仰体系を持つ。建国初期の寧浪には「少なくとも 50 人乃至 60 人のハングイ」がいたとされる。しかし、1950 年代の後半から「文革」に至るまでの度重なる政治的キャンペーンの中でハングイの活動が禁止され、ハングイの数は急減した。特に、「文化大革命」においては、土着の宗教そのものが「封建迷信」と否定され、経堂が封鎖され、経書や法具は焼かれ、ハングイは民衆の前で批判され、伝統的祭祀が禁止された。80 年代の後半に数人しか残らなかったハングイたちが相次ぎ死去し、1989 年には最後のハングイが後継者を残すことなくこの世を去り、「県内ハングイ皆無」の時代が始まったのである。

ハングイ養成校設立のアイディアは、麗江のナシ族が開設したトンパ文化伝承教室（東巴文化伝習班）からヒントを得たという。しかし、彼らはナシ族のトンパ文化継承の仕組みをそのまま受け入れたのではなく、自らの実態に即して独自のスタイルを作ることにした。伝統的な伝授方法ではベテランのハングイに師事し、経典の学習、祭事や儀式及び民族伝統に関する知識を学ぶと同時に、チベット文字やチベット仏教の知識を身に付けることが求められる。一人前のハングイになるためには 10 年以上の修業が必要だが、学校形態による三年間の集中修行を通してハングイの資格が取得できる教育課程を設計したのである。教師として招かれたのは四川省居住の著名なハングイである。プミ族文化保護協会は彼のため年金受給に必要とされる 15 年分の保険料を払い、2019 年度からの受給を保証した。学校の設置と運営に必要な費用の大部分は、「公職を持つ」プミ族のエリートたちが出資し、足りない部分は村民の寄付で賄った。「ハングイ文化学校」は、村にある既存の小学校から空き教室を借りて授業を行った。学校は徹底した無償性を実施し、授業料、教材費、宿泊料、食事代など一切徴取しない。2000 年 4 月入学の一期生は 8 人、2001 年 1 月入学の二期生は 8 人、2002 年 1 月入学の三期生は 13 人、計 29 人入学した。途中、数名が退学し、最終的には 22 人がハングイの資格を獲得して卒業した。これによって、ハングイの「後継者不足の危機」は解消された。2005 年、「ハングイ文化学校」は財政難を理由として閉鎖されるが、2017 年 4 月、寧浪県庁所在地に「ハングイ文化教室」（韓規文化培訓班）へと看板を換えて再出発を果たした。在学期間も 3 年から 1 年半に短縮させて教育課程を設定し、2018 年 12 月に 6 名の修了生を送り出した。

プミ文化保護協会の関係者は、今後は「学校」や「教室」のように完全に生産労働から離れて行う Off-JT 形式から「年に一定期間だけ集まって集中学習と実習を行い、他の時間は家に帰って通常の労働に従事する」「OJT」方式への転換を検討したいとの見解を示した。プミ族の宗教的職能者育成の実践は初期の「慣習 制度」（師匠からの個別的伝授から学校による制度化された伝授）の図式から、危機脱出に成功してからは更に柔軟な伝承システムへの転換が示された。プミ族は、試行錯誤を重ねながら機能しなくなった従来の自然発生的ハングイ継承の仕組みを新たな柔軟性を持つシステムに創り直すことでハングイ不在の危機からの脱出に成功したのである。

この事例からは、文化伝承において、熱意のあるエリート集団の存在、民族文化消費の基盤、実態に即した柔軟な体制、が不可欠の要因であることが示唆された。これらの要因は、プミ族の実践が他の西南少数民族の文化伝承装置の再構築においてモデルとなるための前提ともいえる。従来の伝授方式でも、また正規の学校でもないプミ族の実験が少数民族の文化伝承の第三の道として定着するか、の可能性は現地での応答を踏まえて検証される課題であり、今後の研究課題としたい。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 金龍哲	4. 巻 第67巻
2. 論文標題 「時空圧縮時代」における周辺文化の変容と再編 中国西南のモソ人の母系社会を事例として	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教育学研究紀要	6. 最初と最後の頁 43-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金龍哲	4. 巻 第4号
2. 論文標題 伝統文化教育における「地域」の位置づけに関する比較考察 カリキュラム・マネジメントの視点から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 アジア教育文化ジャーナル	6. 最初と最後の頁 1 - 18.
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金龍哲	4. 巻 65
2. 論文標題 中国西南における文化的多様性と少数民族の信仰体系の現状	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 教育学研究紀要（CD ROM版）	6. 最初と最後の頁 309-314
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金龍哲	4. 巻 34
2. 論文標題 母系社会において表象される男女の役割分担と社会的地位 モソ人の語る “女たちの天下、男たちの天国” は果たして可能か	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本臨床内科医会会誌	6. 最初と最後の頁 41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 二宮皓、新井浅浩、長島啓記、渡邊あや、鴨川明子、金龍哲等	4. 巻 1
2. 論文標題 海外の教科書制度等に関する研究調査報告書	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本教科書研究センター	6. 最初と最後の頁 89-96
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 城川美佳、大島憲子、小河原格也、畑中高子、山本妙子、生田倫子、杉山みち子、金龍哲	4. 巻 17
2. 論文標題 保健・医療・福祉分野の大学生における地域貢献活動への参加状況と同活動参加への支援ニーズ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 神奈川保健福祉大学誌	6. 最初と最後の頁 129-138
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金龍哲	4. 巻 創刊号
2. 論文標題 問われる他者へのまなざし 文化多様性の保全に寄与する教育研究の課題.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 アジア教育文化ジャーナル	6. 最初と最後の頁 1-2
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金龍哲	4. 巻 5
2. 論文標題 共生社会論の諸相とその系譜 共生は如何なる論理で語られてきたか	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本語文化研究	6. 最初と最後の頁 399-408
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計17件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 金龍哲
2. 発表標題 地域の伝統文化の保護・伝承における学校の役割 三浦半島M小学校の実践を事例として
3. 学会等名 中日教育研究学会（東京・リモート）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 金龍哲
2. 発表標題 個人の「語り」に紡がれる古里と里言葉の意味世界 「消滅危機」を宣告された八丈語話者の記憶
3. 学会等名 東アジア日本学研究会（日本大学） リモート開催
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 金龍哲
2. 発表標題 伝統文化教育における「地域」の位置づけに関する考察 カリキュラム・マネジメントの視点から
3. 学会等名 東アジア日本学研究会（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 金龍哲
2. 発表標題 エイジレス社会は可能かー人生百年時代における教育の制度設計を考える
3. 学会等名 中日教育研究学会シンポジウム（ウェブ開催）（招待講演）
4. 発表年 2021年



1. 発表者名 李剣,黒河内仙奈,間瀬由記,金龍哲
2. 発表標題 日本における高齢者看護人材育成の現状と課題 学部段階のカリキュラムを中心に
3. 学会等名 中日教育研究学会(ウェブ開催)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 金龍哲
2. 発表標題 時空圧縮時代における周辺文化の変容と再編 文化変容をめぐる諸言説への批判的考察
3. 学会等名 中国四国教育学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 金龍哲
2. 発表標題 周辺文化の伝承実践における文化の変容とアイデンティティの再構築 再帰的近代化論からのアプローチ
3. 学会等名 アジア教育学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 金龍哲
2. 発表標題 伝統文化の伝承をめぐる形式陶冶論的解釈と仮説 八丈島での危機言語調査を踏まえて
3. 学会等名 中日教育研究協会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 金龍哲
2. 発表標題 「大師」の誕生 チベット族の村に生き延びたプミ族ハングイの家系
3. 学会等名 日本文化人類学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 金龍哲
2. 発表標題 母が歌い、娘が舞う 半島の少女たちが受け継ぐ伝統文化の保護と継承に関する調査
3. 学会等名 東アジア日本学研究会（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 金龍哲
2. 発表標題 「学校」で養成された宗教的職能者の現状 「ハングイ文化学校」卒業生の調査を中心に
3. 学会等名 アジア教育学会第14回研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 金龍哲
2. 発表標題 中国西南における文化的多様性と少数民族の信仰体系の現状 土着信仰の宗教的職能者の後継者問題を中心に
3. 学会等名 中国四国教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 金龍哲
2. 発表標題 周辺化された文化の保護と伝承 プミ族の試みが示唆する第三の道の可能性
3. 学会等名 神奈川県立保健福祉大学学内研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 金龍哲
2. 発表標題 宗教的職能者の育成を目指した村立学校のその後 プミ族の試みが示唆する“第三の道”の可能性
3. 学会等名 日本文化人類学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 金龍哲
2. 発表標題 言葉の消滅危機を宣告された人たち 自文化へのまなざしはどう変わったか
3. 学会等名 東アジア日本学研究会（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 金龍哲
2. 発表標題 中国西南における宗教的職能者育成システムの再構築 文化多様性の視点から見たプミ族の事例
3. 学会等名 アジア教育学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 金龍哲
2. 発表標題 伝統文化の伝承をめぐる形式陶冶論的解釈と仮説 八丈島での危機言語調査を踏まえて
3. 学会等名 中日教育研究協会 2(東京)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 日本教科教育学会	4. 発行年 2019年
2. 出版社 教育出版社	5. 総ページ数 191
3. 書名 教科とその本質 - 各教科は何を目指し、どのように構成するのか	

1. 著者名 二宮 皓	4. 発行年 2023年
2. 出版社 学事出版	5. 総ページ数 264
3. 書名 世界の学校	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------